招請講演３

生命誌からみた微生物研究の未来

ＪＴ生命誌研究館

○中村 桂子

アフリカにある研究所を理事として毎年訪問していた頃、実感したのが、人間の暮らしの基本として外から手を貸すことができるのは、公衆衛生と初等教育だということでした。食は自らに任せるのがよいと思いますし、いわゆる近代化を外から進めるのは考えものです。

医学・医療はどうしても先進的分野に眼を向けることになりますが、人間を生きものの一つとして見ていく生命誌の立場からは、地球上での人間の生き方を考えることになり、途上国をも含めたあらゆる社会での感染症との向き合い方が、それを考える興味深い切り口となります。

医学・医療の歴史を概観すると、１９世紀の微生物の狩人（病原菌の発見とそれとの闘い）時代があり、それはワクチンや抗生物質などで大きな成果をあげました。２０世紀後半からは遺伝子の狩人（内因性の病気との闘い）時代が始まり、今それが大きな流れを作っていますが、その成果はまだこれからです。遺伝子に入り込むことは重要ですが、そこに止まらず、新しく微生物の耕作人（微生物とヒトとの関係づくり）という時代を考える時ではないかと思っています。

地球に生命体が誕生して以来３８億年という長い時間を生きてきた生きものたちの歴史と関係を知る「生命誌」という視点が、感染症のこれからに役立てたら幸せです。